

コメント及び質疑

コメント

司会(井上) ただいま積先生からご講演をいただいたところで、小原先生からコメントをお願いいたします。

小原 積先生から非常に多岐にわたるテーマについてお話しいただきました。私たちが先生にお題としてお願いしました「宗教倫理」に対して我々が求めるような問題提起をしてくださったのではないかと考えております。今回、採り上げられた一つひとつのテーマは、この時間の中で完結できるものではなく、時間をかけなければならないものもあります。しかし積先生のような幅広い視点から問題を見ていくことも大事だなと思いました。積先生がお話してくださったポイントを振り返りながら私自身の見方も加えて論点をいくつかまとめていきたいと思います。

積先生は、最初に「宗教・社会・倫理」の関係として3点、整理してくださいました。後半にも出てきましたが、「社会が宗教に対して求める倫理」は大事です。これに対応する形で信仰者が信仰の加害者性を自覚しなければならない、という対応関係があると感じました。宗教が社会に対して何を求めるか以上に、社会からの要請に対して我々は敏感である必要があります。そこで問題になってくるのは、社会がどんどん変化しているということです。それまでであれば「あたりまえ」であったことが、今や「あたりまえ」ではない、ということが多数あります。

たとえば、奴隷制度が「あたりまえ」の時代が人類史の中にはありました。人種差別も「あたりまえ」でした。男女の性差別も宗教が容認した時代が長くありましたが、社会が変わっていく中で、セクシュアル・オリエンテーションの問題などをめぐって、社会の意識が少しずつ変化し、合意形成をしてきています。そこでできたスタンダードに宗教が追いついていない場合、「あなたたちの中で男女の平等はどうなっているのか」「性的マイノリティの方々の扱いはどうなっているのか」という形での問いが投げかけられるわけですね。社会から宗教が何を要請されているかについて敏感でなければ、宗教が自らの殻の中に閉じこもってしまうことにもなりかねません。

積先生は、宗教による「反社会的行為」「偽善」に対して、社会は立ち向かわなければならないことを指摘されました。「宗教の反社会的行為」と聞いて、みなさんは何を想像しますか。多分、日本の文脈でいうと、みなさんの頭に思い浮かぶのは1995年のオウムの地下鉄サリン事件だと思います。あの事件は宗教に対するイメージを大きく変えたと思います。「宗教の反社会的行為」と聞いて、イスラム過激派によるテロを思い起こすかもしれません。積先生が後半で触れてくださったフランスでは、公道でイスラム女性がブルカという顔や体を隠すような衣装を被れば、「反社会

的行為」として処罰されます。国によって地域によって「宗教の反社会的行為」の内実は、かなり異なります。

釈先生が前半部分で時間をかけて、いろんな方の説明を引用して述べられたのが、人間は理性とか知性より感情によって動いているということです。感情がいかに関心事であるかを進化生物学なども援用されながらお話してくださいました。倫理とか道徳、あるいは共感能力の起源がどこにあるのかは、現代の進化生物学の大きなテーマになっています。それらの隣接概念として「利他性」という言葉もあります。共感能力や利他性は人間の占有物ではなく、広い意味で考えれば、昆虫などにも多く見られます。たとえば、親が生まれてきたばかりの子どもに自分の体を食わせるような例があります。ハチやアリの世界でも、自らを犠牲にして集団のために働く行動はたくさん見られます。しかし同時に、どういう生命種の中においても、ただ乗りする存在、フリーライダーはいまいます。しかし、フリーライダーが多すぎる集団は、他の集団との生存競争の中で淘汰されていきます。我々が人間特有のものとして考えがちな共感能力や利他性は、生命進化の中で獲得されてきたものです。そういう研究が近年、なされています。釈先生が「ミラーニューロン」でお話されたように、目の前で他人が痛い思いをしていたら、脳の同じ部位が電氣的に反応します。「ミラーニューロン」仮説は最初、赤毛サルの実験で見つかりましたが、類似のものが人間にもあると考えられます。

共感には集団を維持する上で大事なものです。しかし同時に問題もあります。問題は「共感の方向性」です。現在、ISに代表される過激なテロ集団は大きな「共感力」をもっています。たとえば、ヨーロッパでイスラム教の2世、3世として生活している若者たちの中には、名前がアラブ名であるというだけで就職差別を受け、貧しさから抜け出せない人たちがたくさんいます。そういう不満や不安を抱えている人たちの心を強くとらえる共感的なナラティブの力を IS は持っています。「お前たちの人生はこれでいいのか、もっと大事なことができる場所が他にある、助けてくれないか」という言葉は若者の「共感力」を激しく揺さぶるわけです。ヨーロッパ、アメリカそしてアジアからも、多くの若者がISにリクルートされています。この背景にあるのは「共感力」です。共感する力は、時として悪用されるのです。他者への共感は大変ですが、それと同時に、間違った共感の場に引き込まれないための自我の核も、宗教が提供すべき大事な部分ではないかと思えます。世の中には様々な誘惑がありますから、それに対して適切にセンサーを働かせながら「共感の方向性」をきちんと見定めることも、宗教倫理の働きの一つではないかと思えます。

宗教の歴史を振り返ってみても、共感能力が、よい方向に働いた場合と、悪い方向に働いた場合があります。釈先生は「内的集団」と「外的集団」という言い方で話されましたが、イングループとアウトグループの問題です。人間だけでなく、すべての生命種は身内びいきです。自分に血縁的

に近いものを優遇しようとしています。自分が属するイングループに対しては利他性もよく働きますが、自分たちの他の集団、アウトグループに対しては利他性ではなく、反対に敵対心が働く場合があります。仏教には「殺生戒」、聖書にはモーセの十戒の中に「汝、殺すなかれ」という言葉があります。しかし殺してはならないという戒めを文字通り守っている宗教や民族は、一つとして存在しません。自分たちの集団の内部では殺してはいけないと考えます。しかし、もし他の集団が自分たちの集団を攻めてくれば、相手を殺害することは美德とされます。殺してはならないという戒めを普遍的に適用することが、いかに難しいかを、人類の歴史は物語っています。

「自分に近いものを利する」という感覚が遺伝的に組み込まれているものだとするならば、我々は一体、どうしたらよいのでしょうか。中国人、韓国人、イスラム教徒、キリスト教徒、様々なイングループ、アウトグループの境界線があります。境界線ごとに自分の集団の内側は大事にするが、外にはそうはしませんということには、遺伝的な根拠があります。しかし私は、生物学的な限界をブレークスルーしていく力が、宗教の中には潜在的にはあるのではないかと考えています。我々は身内びいきになりがちな存在であるということを認識した上で、そうならない道を模索するということです。男性であれば「男性に有利な社会をつくりたい」と考えたり、また、多くの人が異性愛を中心とした社会が当たり前だと考えてきたわけですが、自分と立場の違う人たちにも、共に生きる権利があることを確認し、そのために必要な法を作っていけば、人間は一時の感情で暴走せずに済みます。その手助けを宗教はできるのではないかと思います。このあたりを釈先生は丁寧にお話してくださいました。

宮台真司さんがいう「感情の劣化ではなく、共感の劣化ではないか」ということにも同感ですが、やはり問題は「共感の方向性」です。フランスの場合、宗教を社会から追い出す一つの秩序として「世俗主義」、政教分離原則としてのライシテがあります。釈先生がいわれた「社会が用意する丸テーブル」、ヨーロッパ社会が用意している丸テーブルは何でしょうか。啓蒙主義、自由と平等、人権ということを理解できる人は「座ってくれ」という丸テーブルがあります。そこには「男女は平等」という丸テーブルもあって、イスラムの人たちに対して「お前たちはそこに座れるか」と質問をするわけですが、この丸テーブルは社会が用意しますが、必ずしも、すべての人に平等とは言えません。丸く平等に見えますが、時としてそれは他者を排除するための丸テーブルであることも自覚する必要があります。

宗教がもつべき視点の一つは、自分の前に丸テーブルがあり、自分はその中に座るかもしれないが、そこに座れない人たちは一体どこにいるのか、どういう人たちがそこに座れないのか、近寄ることすらできないのかということを考える想像力だと思います。これは「宗教倫理」がもつべき一つの

方向性、「モラルコンパス」でもあります。この視点は積先生が述べられた「宗教の対称性を考える力」と深く関係していると思います。「対称性の回復」ということで積先生が3番目に採り上げてくださった参考事例に「ベテルの家」がありました。私も札幌で3年間過ごしたことがあって「ベテルの家」の活動については知っていますが、説明されたように、すごく不思議な場所だと思います。それを可能にした宗教的な価値観には意味があるはずで、社会の秩序、丸テーブルに座れない人たちに対して「一緒にテーブルに座ろう」と背中を押してくれる力が宗教の中にあるのではないのでしょうか。

積先生は「儀礼」についても話してくださいました。その際、キーワードとして「クロノス」と「カイロス」が取り上げられました。ティリッヒの言葉は有名で私も時々使いますが、いずれもギリシャ語です。現代社会はクロノスに支配されていると言ってよいでしょう。クロノスはカレンダー的な時間、計量可能な時間です。スマホやケータイもクロノス的生活のためのツールです。現代人は、いろいろな予定をきちんと入れておかないと落ちつかず、隙間があることを嫌います。クロノス的なものに支配された社会の中で、働き方改革が叫ばれ、休みを取れ、能率を上げろ、と言われても、生活の質は変わらないと思います。クロノスが水平的で定量的な時間とするならば、カイロスは垂直的な介入ですね。人との偶然の出会いであったり、孤独の中での気づきであったり、日常を対象化できるようなカイロスの時間を我々も持っているかどうか。宗教が、カイロスを少しでも回復できる道筋を示すことができれば、現代社会に対し大きな意味を持つと思います。

カイロスは聖書の中では極めて大事で、イエスが宣教の最初に語ったといわれる「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコによる福音書 1:15)という言葉の中の「時」がカイロスです。「時は満ちる」という感覚は今、失われつつあります。じっと待つ、待って満ちて、そして変化していくという感覚です。現在の教育はどうでしょうか。教育もまたクロノスの時間のもとにあると思います。子どもを急かして、親も先生も「勉強しなさい、勉強しなさい」と言います。子どもがサナギになって蝶になる瞬間、「時は満ちる」そのときを待つことができません。サナギの状態から早く蝶になれば、外側から叩いているようなものです。いつ羽化し、新しい生命として飛び立っていくか、本来ならば、じっくりと待つ、カイロスの時間の中で人の成長を見守るべきだと思いますが、実際にはそうはなっていません。こうした現状に抗う時間の感覚、クロノス的な時間に抵抗できるカイロスの時間の感覚を、それぞれの宗教が、どういう形で提供できるかに、私は関心を持っています。

クロノスには切れ目がありません。切れ目なく、シームレスに時間が流れていきます。子どもたちが使うSNSも時間の切れ目を奪います。ひと昔前であれば、子どもたちは学校でいろんなことが

あったとしても家に帰れば学校のことを忘れることができました。面倒なこと、しんどいこと、いじめは昔からありました。しかし学校の時間は、学校が終わると終わっていました。ところが今はSNSなどによって学校の人間関係は24時間続きます。切れ目がありません。切れ目がないこと、シームレスであることはITの世界で極めてポジティブに考えられています。どこにいてもインターネットが使える、スマホを開けても、PCやタブレットを開けても、同じことがシームレスにできるのは、すばらしい技術革新として評価されます。しかし同時に、シームレスは人間の大事なものを奪ってしまう可能性もあります。適切な区切り目を与えるカイロスの時間を回復しなければ、ITによって加速されるシームレスな時間の感覚は、私たちの根源的な生命力、生命のリズムを弱らせていくように思います。

積先生は「宗教間対話」のテーマにおいて、内田樹さん、内藤正典さんの話をしてくださいました。内藤先生は同僚でもあり、普段、いっしょに仕事をしている方です。積先生がお話された2012年のアフガニスタンの会議には、私も参加していました。内藤先生の本にも記されていると思いますが、当時、カルザイ政権で、同志社の礼拝堂に、政権側の役人、大臣とタリバーン側の人たちがいました。アフガニスタンで、もし両者が対面すれば、殺し合うような間柄です。しかし、日本が中立的な国だから、敵対する両者が顔を合わせる機会を作ることができたのです。この会合の3年前から、私が一神教学際研究センター長のとき、タリバーンの方々を時々、同志社にお呼びしていました。その時も「危ないことをするなあ」と周りから言われることがありますが、対話しやすい人たちを呼んで対話するのは意味がないと思っていました。対話し難い人たち、対話の丸テーブルに呼ばれない人たちを、あえて呼ぶことが大切だと考えていました。

オフィシャルな研究会をした後は、出町柳の居酒屋さんでアフガニスタンからの来客と鍋をいっしょに囲みました。鍋から豚肉を外すのは当然として、どういう鍋がよいのかを毎回考える中で、アフガニスタンの人たちが好む鍋が少しずつわかってきました。そのような鍋の研究を経て、2012年の会議の後で、アフガニスタンで敵対的な関係にある人たちが、出町柳の居酒屋さんで同じ鍋をつつくことになりました。魚を中心にした鍋です。食事をともにすることによって、積先生の言葉で言えば「儀礼」をともにすることによって、イデオロギーの違いを超えていくことができます。おなかが空いて、おいしいものにありつけたら満たされるという感覚は、何を信じるとか、信じないとか、と関係ないです。身体の基本的な欲求です。思想とか信仰の違いを超えて対話できることは大事です。

積先生が「宗教間対話」で紹介されたように、「共通の理解の上に立たなければ対話ができない」のではなく、そういうことなしに成り立つ関係は、いくらでもあると思います。ややこしい違いは

早々に棚上げして「違いを許容できる関係」があった方が面白いと思います。「仏教と基督教の共通項は何か、アガペーと慈悲は同じではないか」という議論は、学問的には意味があると思いますが、あまり無理な形で共通点探しをするより、「違いを積極的に認めていく感覚」の方が大事ではないかと思います。内藤先生が「協約不可能である」といわれたように、フランス的な価値、ヨーロッパ的な価値とイスラーム的な価値が協約不可能だというのはよくわかります。しかし、これで終わらずに、違うことを認識した上で「では、どういう妥協点が探れるか」を考えることが、今のヨーロッパ社会には求められていると思います。

「信仰の加害者性」を指摘された釈先生の視点はシャープだと思いました。これに対応する、次のような聖書の言葉があります。「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っではならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。こうして、自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない」(マタイによる福音書 10:34-37)。ここでは、きわめて強力な「排他的な力」を感じることができます。釈先生が語ったとおりです。愛を語り、それによってみんなが仲よくなるような安直な平和論ではありません。これを「アガペーの暴力性」と呼ぶこともできるかと思いますが、新しい愛の形は、時として、家族に代表される既存の社会秩序を破壊しかねないくらいの力をもっています。それを十分自覚することによってはじめて、信仰者は自らの信仰を適切にコントロールすることができるのではないかと感じました。私のコメントは、ここまでにさせていただきます。

質疑応答

司会 ありがとうございました。恐縮ながら司会者の立場からクロノス的な時間を進めさせていただくということですが、釈先生からのコメントをいただきたいと思います。

釈 ご丁寧なレスポンスをありがとうございます。すでになりにクロノスが残り少なくなっていますので(笑)、私の方からもう少しだけ応答させていただきます。お話にありましたフランスの問題。世俗社会においては、ちょっとした宗教行為も「反社会的」と見なされる場合がある。また、見かけは「丸テーブル」であっても、そこに着席すること自体が宗教性を棄損してしまう場合もある。よいご指摘をいただきました。みなさんご存知の通り、フランスはもともとカトリックの支配が強く、そこからの脱出にかなり精力を注いできた経緯があります。いわば、「公的な領域に宗教を持ち込まない」ということを、フランスはやっと手に入れたんですね。ですから、ライシテ(脱宗教)は、フランスの誇りでもある。ですから、たとえばイスラームのように世俗社会とは相容れない信仰では、テーブルは

決して丸くないといえますか、とても丸テーブルには思えないんですよね。スカーフやブルキニ（身体を覆った水着）なら脱がされるのに、十字架のネックレスなら「はずせ」などと言われない。そうすると、公的な場から排除しようとしているのは、宗教なのか、イスラームなのか、移民なのか。少なくともテーブルはすごく歪んでいて、とても丸いようには感じない人たちが数多くいるわけです。いわば、フランスがやっとたどり着いたライシテに、ムスリムたちが問題提起している状態。イスラームは「公的場だから」といって、都合よく宗教的様式を着脱したりできませんからね。政治や法律や経済と信仰とを分離したりもできない。そういうタイプの宗教に対して、フランスはどう向き合っていくのか。イギリスのように、「多文化主義」と言えば聞こえはいいが、その実は各信仰・文化と大きな溝をつくっているみたいなやり方も一方ではあります。現状では、フランス型もイギリス型もうまくいっていない。しかし、真摯に取り組むことで、ここにまた新しい「倫理」が発生するのではないかとここに期待したいと思います。もちろん、日本も他人ごとではない。どのようなビジョンで外国人労働者を受け入れるつもりなのか、さっぱりわかりませんからね。

もう一つ、「共感」や「利他性」については、方向性が大事だというコメントをいただきました。おっしゃる通りです。たとえば、こういう実験があるそうです。一人の人間を大勢がよってたかって暴力を加えているシーンを見せる。すると大抵の人は、「嫌悪感」の数字が測定される。ところが、被験者に「こいつはあなたの子をすごく苛めた人間だ」という情報を一つ入れるだけで、それまで「嫌悪感」を出していたのが「共感」に変わるとのことです。方向性ということ言えば、むしろ暴力的なものの方が感染力は強い、といったところもあります。「共感」や「利他性」で、問題が解決するかといえば、そうはいかないわけです。『歎異抄』の第十三条には「我が心のよくて殺さずにはあらず」とあります。今まで自分が殺人を犯してないのは、たまたま犯さずに済む状態だったからであって、状況によっては人をも殺す可能性がある、というわけです。これが「当事者性」ですね。宗教は、「おまえも当事者なのだ」ということを突きつけてきます。「誰もが罪を背負っているのだ。あなたも当事者なのだ」と突きつけてくる。「常に自分は当事者である、決して傍観者にはなりえない」という自覚と、その突きつける行為自体に加害者性があることの自覚、この両方がなければ「共感」や「利他性」の方向性が見えてきません。

さらには、内的集団と外的集団の問題があるので「共感」だけでは、よりよい方向にいかない。これもご指摘の通りです。その境界を超えるものをどう担保していくのか。たとえば、音楽や芸術はとも越境能力が高い。ですから、宗教文化というところにも眼を向けるのが必要だと考えています。

これくらいにしておきます。

司会 ありがとうございます。それでは釈先生のご講演、小原先生のコメント、応答を受けまして

ご質問等ございましたらお願いします。

—— 関西大学の小田淑子です。非常に濃密で、なかなか難しかったです。私はイスラムをやっている関係で、フランスのライシテに関して一言。フランスはカトリックと闘ってライシテを獲得してきたのは事実で、それを重視するのは分かります。ところがイスラムはフランスでは少数派で、マイノリティのムスリムに同じ要求ができるのかという問題がある。圧倒的な多数派社会に、どの世界でも少数派は存在する、ユダヤ人はそういう立場にいたし、日本では韓国・朝鮮人がいますし、「バテルの家」の人たちもそうです。この少数派の人々の権利という観点から考えると、多数派にとっては自分で獲得した権利で、重要な意味があるとしても、同じを少数派や弱者にも等しく要求するのはどうかと思います。フランス社会のムスリムにも、そういう観点があってもいいのではないかと私は思います。それが一つ。

もう一つは「儀礼」の問題。小原先生も最後に「信仰者の加害者意識」を言われましたが、「儀礼」は日常を停止して普段の雰囲気ガラッと変える。「儀礼」は非常に上手に日常を中断することができる。全くそのとおりで、イスラムがすごいのは日常生活の中で毎日の礼拝の際、神のことを一瞬だけ思い出し、そしてまたすぐ商売に戻る。一瞬、神に戻る礼拝を習慣化することで信仰を養うという賢明な方法だと思います。このように実際に日常を中断できる力が「儀礼」だと思います。「儀礼」に関しては基本的に評価しないとイケないと思っていますが、一つ気になったのは「儀礼」があることで、それに誰もが参加できるのではないということです。それこそ加害者性というか、日本人は神社に行かないと主張するクリスチャンに対して、「なぜそんなことを言うのか、そういう人ってうっとうしい」と言いかねない。「儀礼」はまさに宗教なので、いい方ばかりではなく、「儀礼」はイングループの中ではいい効果を、カイロスをもたらすことができるけど、アウトグループは原則として「儀礼」には参加できない。「違いを楽しむ」と小原先生は言われましたが、日本人はどちらかというと「なぜ神社にいっしょに行かないのか」といふかり、特に行動面での違いを嫌いがちです。阪神タイガースが開幕前に神社で祈願する場面がニュースになりますが、私は「クリスチャンの人は不愉快だろうな」、「ムスリムがいたら絶対拒否するだろうな」と思って見えています。多くの日本人はその場面を見ても、全員が参加できることが当たり前としか感じないのが現実だろうと思います。今日の話の中で「儀礼」をプラスイメージで説明されましたが、この問題が抜けているのではないかと感じました。

釈 確かにそうなんです。 「儀礼」がもたらす排除性もございます。「異なる宗教の儀礼の場身をおかない」というのは信仰の証しだと考え、拒否する態度を重視する宗教もありますから。つまり、明確に信仰をもって、異なる宗教の儀礼への参加を拒否する、という選択は尊重されるべきだと思います。

います。

また、「信仰もない人が儀礼に参加することはできない」という場合もあります。信仰者だけで営む儀礼に、信仰もない者がずかずかと入っていくことは望ましくないでしょう。

儀礼は「つながり」も生み出しますし、「排除」も生み出します。これはまさに信仰の加害者性のお話につながります。このことに無自覚なのは具合が悪い、そういったご指摘かと思います。

この点をしっかり自覚的しながら、儀礼への敬意や畏敬の念を大切にすることがポイントかと思っています。おっしゃるように、儀礼はモロに宗教ですので、誠実に細やかに丁寧に取扱わねばならない。儀礼への感性がにぶると、儀礼の悪い面が出てしまいます。

ご指摘の負の側面や、注意事項を踏まえた上で、やはり儀礼が生み出すコミュニタス状態(社会的秩序が解体された状態)には大きな手がかりがあると考えております。

—— 龍谷大学の卒業生です。

釈先生は池田市のお寺で認知症の方々を支えておられる。私も家族に認知症を抱えているので、いろいろと先生に伺いたいのですが。今、認知症の人をどういうふうにするかということで、政府も「オレンジプラン」を出しています。先生はグループホームをされていますが、宗教者がどう向かいあうことができるか。公的に国とか自治体がつくっていかないといけないと思いますが、昔から痴呆症といっている頃はどうだったのか。誰が向き合っていたのか、当事者なのか、宗教家なのか。自分の町でも結構、都市化が進んでいて福祉施設もあるんです。システムはできている。「オレンジプラン」を進めていくということで市民対象にやっていますが、実際、制度的に進めても、ちょっとひどくなると「病院に入れなさい」と。町には入院させる施設がない。形骸化してしまって家族がいればいいんですが、いない場合、山の中までつれていかないといけない。尼崎の場合はそういう状況ですが、頼りになるのはお寺です。普通の社会福祉のところではなく、法話を聞きにいくと、ちゃんとみなさん、親切で、宗教的な力で親鸞の教えとかで人間観があるのかなど。先生は認知症の人に対して制度的なものを含めて、宗教倫理の立場からどうお考えなのか聞きたいと思います。

釈 求めておられるものにうまく答えられるかわかりませんが、思うところをお話してみます。

かつては高齢者を家族が支えておりました。でも、家族の形態が急速に変わりましたので、家族で高齢者をケアするのは困難な状況となりました。オレンジプランでも、社会の理解や地域のサポート、そして専門家の養成が提唱されています。そういう取り組みが必要であることは間違いないと思います。そしてこの問題とお寺とを結びつけるものは、やはり「公共性」や「地域共同体」の意識だろうと思います。ですから、宗教者の公共活動や公益活動といったところに宗教倫理がからんで

くることとなります。たとえば、公共活動と伝道はつながっているのか、つなげるべきではないのか、そのあたりも論点となります。

また、これまでほとんどのお寺は、地域コミュニティの上に乗っかって運営されてきました。私が住職をしている寺院も、典型的なムラのお寺です。ですから、住職として地域にどう貢献するかといった問題意識でNPO法人を立ち上げたわけです。

お寺というのは、その地域の事情をよく知っているでしょう。どこの家と、どこの家が親戚だとか。どこどこが仲良しだとか、仲が悪いとか。〇〇さんは、昔、看護師さんをしていたけど、もう辞めているとか。そういう情報をたくさんストックしていて、人的ネットワークも持っている。ですから、お寺のポテンシャルを生かすことができれば、短期間でよりよいサポート体制を構築することも可能でしょう。その意味では、お寺も公共性のためのステークホルダーのひとつであり得るわけです。

さて、先ほどの「公共活動と伝道」という論点ですが、私の場合は「仏教の伝道や浄土真宗の布教のためにやっているのではない」との意識で活動しています。伝道や布教のツールとして公共活動をするのはいかがなものか、と考えているためです。私自身は、地域のお寺の住職として何ができるか、といった視点で動いております。そのところは、私なりの「宗教に関する倫理の問題」でもあります。

—— ありがとうございます。

司会 ありがとうございます。予定しておりました時間がやってまいりました。本日いろんな話題をと採り上げながら、グローバルな問題から身近な問題まで、具体的な問題から宗教と倫理の関係にかかわる根源的な問題まで幅広く及んだと思います。大きな問題提起と示唆をいただいたと思います。みなさまもそれぞれの関心の中で受け止めていただければと思います。また学会員の皆さまにおかれましては自らの研究の課題としていただければ幸いです。それでは釈先生、小原先生、どうもありがとうございました。これもちまして「宗教倫理学会第18回学術大会」の講演会を終了させていただきます。ご静聴どうもありがとうございました。